ZAIDAN Report

【Contents】

2025年度助成先より、「あいの実」様の活動についてご紹介します

第27号　2026年11月

発行：公益財団法人
太陽生命厚生財団

「ZAIDAN Report」第27号では、「社会福祉法人 あいの実」様の活動をご紹介します。

児童発達支援や放課後等デイサービス、ショートステイ、訪問介護、家族支援、就労支援までを一体的に展開し、医療的ケア児者・重症心身障がい児者とその家族が、地域で安心して暮らせる仕組みづくりに取り組む「社会福祉法人 あいの実」様の活動の中から、当財団の2025年度助成を活用して機材を充実させた「視線入力装置を活用したテキスタイルデザイン」による創作活動など、利用者の自己表現や社会参加を支援する取り組みを中心にご紹介します。

「社会福祉法人 あいの実」様についてご紹介

●前身である「NPO法人あいの実」は2005年に設立されました。理事長自身が義父の介護に苦心した経験から、「障がいのある方や高齢者とそのご家族を社会全体で支える必要性」を痛感し、訪問介護事業所から活動をスタートしました。

●当初から医療的ケア児者・重症心身障がい児者の通所事業所の開設を目指し「自分にしてほしいように人にもする」を法人理念に掲げ、「弱い立場にある人を理解できる本当に喜ばれるサービス」を意識しつつ、障がい児者とそのご家族に寄り添った支援を続けてきました。

●2014年、放課後等デイサービスを開始したのを皮切りに、現在では児童発達支援・生活介護事業を含め3つの事業所を展開しています。入浴サービスを提供していることも特色の一つです。

●さらに障がい児者とその家族の伴走者であり続けるため、短期入所・相談支援をはじめクリニックの開設や介護員養成研修事業にも取り組んできました。

●ご利用者様やご家族が孤立することなく、同じような状況にあるご家族同士がつながり、また、支援の輪が広がっていくことを目指し「あばいんプロジェクト (*1)」を立ち上げ、その活動の一つとして「シードキャンプ(*2)」も開催しています。さらに、働く場としてのカフェの運営も手掛けています。

●2021年には社会福祉法人となり、支援の幅をさらに広げています。最近では、療育活動にも力を入れ、各種スイッチを使って自分でものを動かすことや、「視線入力」を教育プログラムに取り入れています。

(*1)「あばいんプロジェクト」：あいの実が2023年から始動した、医療的ケア児とその家族の「生きがい」と「生きやすさ」を創り出すための運動。
「あばいん」とは、仙台弁で「いっしょに行こうよ」という意味です。

(*2)「シードキャンプ」：施設の敷地内にキャンプサイトを再現し、医療的ケア児ファミリーが安心してアウトドア体験や旅行の思い出を作れる参加型イベント。



【久保潤一郎専務理事】　【乾祐子理事長】



「あいの実ストロベリー」がある“西田中事業所”の外観

医療的ケア児者等問題と「あいの実」の取り組み

医療的ケア児者等問題

医療の進歩により以前なら救えなかった命が救えるようになったことから、医療的ケア児者・重症心身障がい児者は増加傾向にありますが、成長段階ごとにさまざまな課題を抱えており、医療中心の支援から地域生活を支える支援への移行が十分に進んでいないことが大きな課題となっています。
この課題に対応するため、2021年に医療的ケア児支援法が施行され、支援センターの整備や保育・教育現場での支援強化が進められました。
さらに2026年に成立し、2027年4月から施行される改正法では、支援対象が18歳以降の医療的ケア者や重症心身障がい者にも拡大され、「18歳の壁」の解消や就労・住まい・レスパイト支援(*3)の充実が図られます。
一方で、看護師不足や受け入れ施設不足、地域格差などの課題は依然として残っており、切れ目のない地域支援体制の構築が求められています。

(*3)「レスパイト」：介護や育児など、普段誰かのケアを行っている人が休息できるよう支援すること。「小休止」「中休み」「中断」といった意味合いをもつ言葉です。

●乳幼児期（誕生～未就学児）
長期入院後、人工呼吸器や胃ろうなどを使用しながら在宅生活へ移行します。家族は医療的ケアを担う重い負担に直面し、福祉サービスに関する情報不足から孤立しやすい状況にあります。また、受け入れ可能な保育施設が少ないため、保護者、とりわけ母親が離職を余儀なくされるケースも少なくありません。

●学齢期（小学校～高校卒業）
学校生活が始まることで教育機会は広がりますが、医療的ケア体制の不足が大きな課題となります。看護師不足などにより保護者の付き添いを求められることがあり、就労や休息の機会が制限されます。さらに、通学送迎や放課後等デイサービスの利用にも多くの制約があり、家族負担が継続します。

●移行期・ポスト学齢期（18歳前後）
卒業後は福祉サービス中心の生活へ移行しますが、小児科から成人医療への引き継ぎが円滑に進まない場合があります。また、医療的ケアや重度障がいに対応できる生活介護事業所などの受け皿が少なく、卒業後の日中活動の場の確保が大きな課題となっています。

●成人期～高齢期
加齢に伴い二次障がいや健康問題のリスクが高まる中、家族には「老老介護」の負担がのしかかります。特に「親亡き後」に本人が安心して暮らせる住まいや支援体制の確保は深刻な課題です。また、障がいのない兄弟姉妹に将来的な介護や後見の負担が集中することも懸念されています。

「あいの実」の取り組み（事業展開）

●あいの実ラズベリー
　医療的ケア児・重症心身障がい児を対象とした児童発達支援・放課後等デイサービスです。NICU退院直後から利用できるほか、人工呼吸器利用児にも対応し、母子分離型の支援や入浴サービスを通じて家族の負担軽減を図っています。

●あいの実クランベリー
　医療的ケア児・重症心身障がい児のためのデイサービスとして、高度な医療的ケアが必要な子どもの受け入れを行っています。児童発達支援から学齢期まで切れ目のない支援を提供し、家族のレスパイトや社会参加を支えています。

●あいの実ブルーベリー
　医療的ケア児者・重症心身障がい者を対象とした、18歳以上の方が利用する生活介護事業所です。法人内のラズベリー・クランベリー（児童発達支援・放課後等デイサービス）とあわせて、子どもの頃から大人になってからまで切れ目なく支える体制をとっています。特別支援学校卒業後の「18歳の壁」への対応を重要な役割としています。

●あいの実ストロベリー
　医療型短期入所（ショートステイ）と日中一時支援を行う事業所です。医療的ケアが必要な方を長時間受け入れ、保護者のレスパイトや就労継続を支援するとともに、将来の自立や親亡き後を見据えた利用機会を提供できるよう体制を整えているところです。

●あいの実オリーブ
　障がい児相談支援・計画相談支援を担う相談支援事業所です。利用者や家族の希望に沿ったサービス利用計画の作成や関係機関との調整を行い、地域生活を支えるコーディネート機能を担っています。

●あいの実クリニック
　医療的ケア児者・重症心身障がい児者の診療を支える地域密着型の診療所です。外来診療やオンライン診療に加え、医療型ショートステイ利用者の健康管理も担い、医療と福祉をつなぐ役割を果たしています。

●ヘルパーステーションあいの実
　居宅介護・重度訪問介護・移動支援などを提供する訪問介護事業所です。神経難病や重度障がい者への支援で培った高度な技術を強みとし、喀痰吸引や呼吸器管理など専門性の高い在宅支援に対応しています。

●ケアプランセンターあいの実
　高齢者や介護を必要とする方を対象に、ケアマネジャーが介護保険サービスの利用計画を作成する居宅介護支援事業所です。利用者一人ひとりの生活状況や希望に合わせ、医療・介護事業者との連携を図りながら在宅生活を支援しています。

●カフェ・ドゥ・チルミル
　医療的ケア児者の母親が働きながら社会とのつながりを持てるよう開設されたコミュニティカフェです。保護者の就労機会の創出と社会参加の促進を目指し、福祉の枠を超えたソーシャルビジネスとして運営されています。

今回の助成申込に至った背景

●医療的ケア児者のための医療型ショートステイや日中一時支援を行っている、「あいの実ストロベリー」では、視線入力装置等を活用した活動プログラムなど、緊急時の預かりだけでなく、将来的な自立を見据えた支援も重視しています。
●「視線入力」とは目の動きを読み取り、パソコンなどの操作や描画につなげる入力方法です。あいの実では、ご利用者様に「生きがい」「やりがい」「自分らしさ」を感じていただきたいと考え、療育の一環として取り入れました。
●導入後は感情表現や意思の疎通を図るうえでプラスになっており、ゲームや絵画などご利用者様の「できること」が広がり、自尊心を高める大切な一つの手段となっています。その中でも特に絵画は、それぞれのアーティストとしての個性が花開き、美しい芸術作品が生まれています。
●こうした活動の広がりには、日々ご利用者様に寄り添うスタッフの思いや尽力に加え、岩手県立大学の伊藤史人先生が開発された視線入力訓練アプリ『EyeMoT』の存在が欠かせませんでした。
●そして、多くの人に、障がい児者への社会の関心を高め、作品から生まれる感動を分かち合う共感者になってほしいと思い、その作品を一冊の本『GAZE ART BOOK』やカレンダーにしました。その結果、多くの人の目に留まり、たくさんの応援や大きな反響をいただきました。
●そこで今度は、その作品をテキスタイルデザイン化(*4)し、より多くの人に触れていただくためには、持ち運びに便利なコンパクトなミシンと様々な機能を持つ高機能ミシン、もう1セットの視線入力用機材など、機材の更なる充実が必要でした。
●作品が服や雑貨など新しい形となり、社会につながっていくことで、さらなる自己表現や社会参加につながればとの思いから助成を申請しました。

(*4)「テキスタイルデザイン」：衣類やインテリアなどに使われる「布（テキスタイル）」の素材、模様、色彩をデザインすること。



【助成前にストロベリー内で開かれたマルシェ】
この時は私物のミシンで作品を制作していました。
たくさんのご来場に感謝です！！



【ストロベリーにおける療育】
モニターを見て勉強中？

助成事業の成果

●助成により機材環境が充実したことで、ご利用者様が自分の意思や興味・関心を表現できる機会が大きく広がりました。ゲームや創作活動、視線入力による作品制作を通じて、それぞれの「好き」や個性が引き出され、自ら選択し表現する喜びにつながっています。
●例えば、スタッフの呼びかけにあえて知らん顔をしてニヤリと微笑む利用者様や、ゲームで驚くほどの集中力と勝負強さを発揮する利用者様の姿からも、その豊かな個性がうかがえます。
●また、おしゃれが好きな利用者様がネイルデザインの色を自ら選んで目を輝かせたり、視線入力で作成したデザインをバッグや小物として形にする活動では、自分が作品づくりに関わっている実感から大きな達成感や自信を得たりする様子が見られています。こうした経験は、自己表現の機会を広げるだけでなく、自尊心や自己肯定感の向上にもつながっています。

●これらの成果を広く発信するため、「あいの実ストロベリー」でのマルシェ開催に加え、2026年2月には仙台市内で成果展示会「あいのきせき」を開催しました。会場には多くの作品が展示され、テレビ局や新聞社による取材も行われました。

●来場者からは「感動した」「視線入力の可能性を初めて知った」「これからも作品を見てみたい」といった声が寄せられ、重い障がいがあっても自ら学び、成長し、豊かに自己表現できることを広く社会に伝える貴重な機会となりました。



①


②


③

【助成金で購入した機材】
①多機能ミシン
②コンパクトなミシン
③PC・モニター・スタンド
今日も大活躍です！！



④


⑤

【展示会「あいのきせき」】
④視線入力・テキスタイルデザイン化を紹介した展示会
⑤展示会におけるストロベリーブース

今後の抱負など・・・

●視線入力による作品づくりは、ご利用者様の自己表現の機会を広げるだけでなく、将来的には作品の商品化を通じて社会との接点や役割を生み出し、障がい児者の自立につながる可能性を秘めています。また、展示会やマルシェなどの発表の場は、障がい児者の可能性や魅力を多くの方に知っていただく貴重な機会となっています。

●仙台市との協働プロジェクト「ほのぴあ(*5)」でも、医療的ケア児の保護者から視線入力を活用した活動への関心が寄せられており、「あいの実ストロベリー」のマルシェで販売したTシャツやバッグを購入されたという声も聞かれます。こうした反応からは、保護者の皆様が子どもたちの可能性に大きな期待を寄せていることがうかがえます。

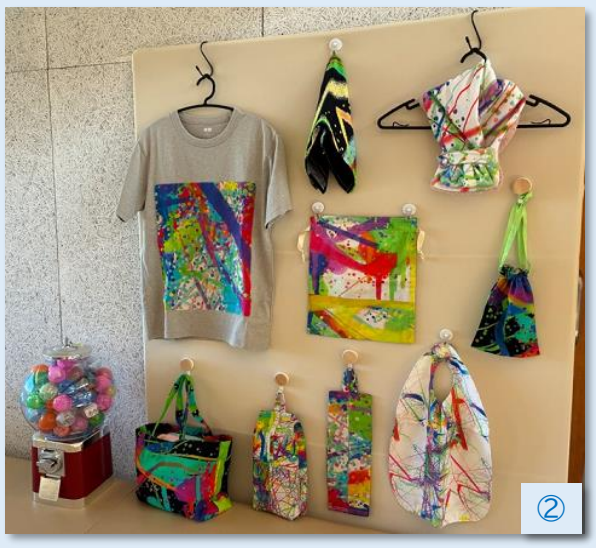
●今後は、視線入力による創作活動やテキスタイルデザイン化をさらに発展させることで、「あばいんプロジェクト」をはじめとする地域の取り組みとの相乗効果を生み、支援の輪を広げていきたいと考えています。

●また、今回の取り組みを通じて、ご利用者様一人ひとりの「やってみたい」「できる」を実現するために必要な支援の方向性も見えてきました。2027年4月には「あいの実マロン訪問看護ステーション」の開設を予定しており、障がい児者とそのご家族にさらに寄り添った支援体制の充実を目指しています。

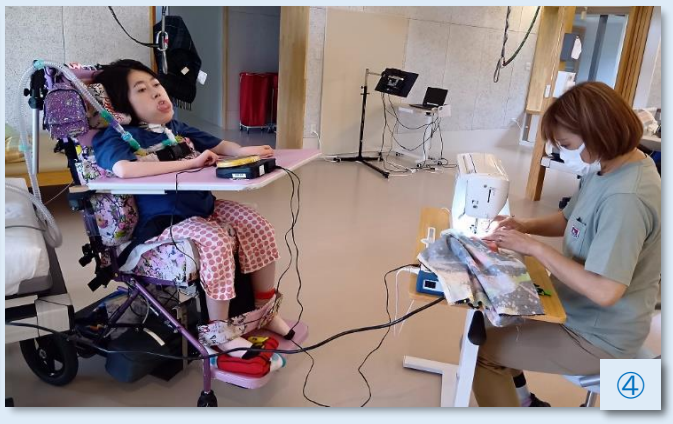
●これからも、一人ひとりの可能性を社会へ発信し続けることで、障がいの有無にかかわらず互いを理解し支え合える地域社会の実現と、「あいの“実”」から広がる新たなつながりの創出を目指してまいります。

(*5)「ほのぴあ」：医療的ケア児者・重症心身障がい児者のご家族を支えるピアサポート（当事者同士の支え合い）プロジェクト。人工呼吸器や胃ろう、痰の吸引などが日常的に必要な子どもを育てた経験を持つ母親（家族相談員）が中心となり、孤独になりがちな家族の相談や交流の場を作っています。


①


②


③


④

【充実した創作活動の様子】
①・④視線入力からテキスタイルデザイン化まで、二人三脚で新たな作品が生み出されます
②・③最近の作品たち
（ガチャガチャのカプセルの中にも可愛い作品が入っています！）

【「マルシェ」（2026年11月開催）のパンフレット】

